



A0

2/4





人へのは神よつふ其
 来由成たつぬにけり
 征夷人の軍源の頼朝
 平家の一族とて
 うちやあふに海一統
 日本六十餘州の
 追捕使の手但成
 多いた下あつて
 まじふふふふふ
 くるくるのや
 ままにふく



由文狀

源頼朝

建久四年十月

全作下法精

事

物今度馬毛鞍
 度輪鍋胆形膝
 星思く結構不
 有割限と由内
 取致位上や面

印の特權ありしや
 富士野の印持あり
 其用意を
 其の時建久巳年四月
 十日將軍頼朝より
 國の大小を御覽
 其來巳月十二日辰刻
 皇別様深きに馳参るべ
 しく候後こそ是れ人々
 支羽痛より副状一通に
 かゝりける枝竹のや

天下の政は皆
 中央事柄に
 上者可に治
 自去二月二日

二月二日御評定あり
 其時建久巳年四月
 十日將軍頼朝より
 國の大小を御覽
 其來巳月十二日辰刻
 皇別様深きに馳参るべ
 しく候後こそ是れ人々
 支羽痛より副状一通に
 かゝりける枝竹のや

元既沈名存
 趣可被出
 文状
 統大吏
 卯月十二日

山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...
 山崎の戦い... 平家の運...

僧侶

右近大守将

右近大守将

并副状及

風河法園



方之...

古く...

平家...

国...

將軍...

ふいふやうに年々ふかふか
 がくく素く飛燕の舞
 るるくく笑のふかふか
 ふくく今頃の朗歌一曲
 とまふくくあの幼龍の尾
 俗天年の美質のよに
 曲垣のりくくか
 くるくく船くくく
 くるくくくくくくく
 感あふまふくくく
 止るくくく頼朝のくく



恒東ハケ咽其介
 近江源氏黨其信
 濃源氏一黨其義
 相模高家其直
 河大名上総下総

城以打主其勢
 及是万騎其将
 場合澤奈須野
 富士野其く仍其
 之状其件

とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も

五月十三日

河内國河内郡
於十二間志右河
船越後地左一番
之目記事出前河
河内國河内郡
於十二間志右河
船越後地左一番

とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も
とて所ふにあらう我々も

河内國河内郡
於十二間志右河
船越後地左一番
之目記事出前河
河内國河内郡
於十二間志右河
船越後地左一番

枕ふもたのりや後
 人ぐにおまをうわん
 其数何十万とて
 らべ東の山をのま
 あと富士川をうけて
 別山をうけて
 北にふんたかば地
 振さるるりや
 庭のうへいふえん野
 たるが庭麻杭鬼程の敷
 どの庭をうけて

義盛二浦一族
 九十三人左二番
 畠山次郎重忠
 武藏七黨者母也
 古之二黨子系也



一族等左三番下
 野小山宇都文結
 城長沼并紀清也
 黨主母也左二番
 常陸國沙家人

さうして平野にあひ
ついでにやうな雄の姿を
あひひくはてしなく
射えられぬ軍其日の所
立にそむれりける其情
にわたるをききしは
のり様とぞお長はあま
連枝をさうろつるの
付く長士すけ及びた
白鶴をせくしたるを
なまじうにわかれり

唐嶋の方小栗
築信田東条家
人々也左田
漢國のあや野
包月里名河田

まへにたつたつたつた
後城とす初元沖を
後とす本立屏を
聞えし其外小條
足利上総公を
まへにたつたつたつた
のへ及び三浦
島山次第重忠
あふ千のふた百人
まへに供せりける
あふた御まへに

見取高梨人々也
右軍番上野大
深洲山と大胡大
室新田の山利
吾妻山名里見

五十年九ありおまじま
 胴丸に二八八すのたかき
 二八八すのたかき
 かの井の三人くわう
 将けふけく仲るのえに
 を立ちくつ次に鎌倉
 の所嫡男を内門者頼
 其頃萬きそくふ十
 二たいま所幼年の所
 ありそくふ武むの
 にあそびせけい無と目



波人進左衛門
 條里即内政提原
 平三系子息源
 左系進左衛門
 上総國古郡人伊水

伊南長水長南佐
 久田山進人進左
 左衛門安房岡内安
 為神傳磯村人
 也古左衛門進左

てを向ふくは甲
ふふふふふふふふふふ
何く百歩の外に其のそふ
何くくそと逆さるるの
射ありくは逆さるるの
実とすよとくは逆さるる
つふふふふふふふふふ
何く伏ひが鬼く後角
射さるるくは逆さるる
てはあふふふふふふふ
にふふふふふふふふふ

人々也右守此配
分々状可改打屋
取ま外人々思
打屋形下奉る後
所也仍配分々

其夫ふふふふふふ
若分の上方に眼さる
りくふふふふふふ
よりくふふふふふ
依古きとふふふふ
石と月々の將軍に
ふふふふふふふ
家督の若ふふふふ
一月に感さるる
谷にふふふふふ

状如
建人軍青月日
沙書下可人相
向横沢色作久
将表束思く紫馬

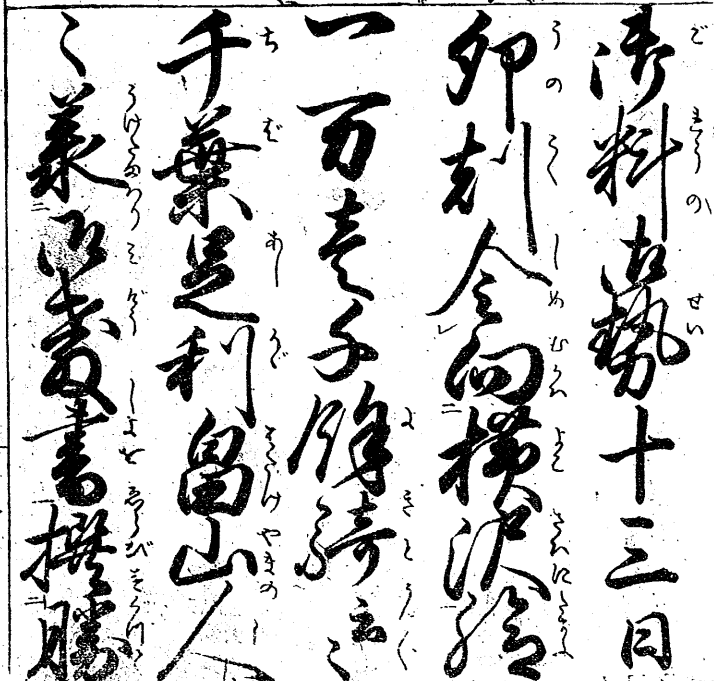
此御威ありゆよりあひ限
 おくゆき所政みのゆ方
 ひとだに御威をあらはし
 せよあきらまらんあに
 梶原平景系とてゆ役にて
 やうく御威にいつうされ
 まんたんとおぼしめされ
 一くせ甲の方(きま)今
 日萬事あきらめく御威
 射えしゆひとに御威はた
 かまてようく扶助せし



大行路至建
 水碑車度母乞
 何人綱平書
 六詔重河小二万
 軍收其初才就城

表賀正由
 考也五月十一日午
 刻今看後河田
 浮橋原松氏
 浮島原名烈擲

光 躋 圓 珍 嶠 巍
巍 美 重 采 渾
渾 間 第 六 子 宮
居 坐 平 城 廣 野
此 極 勢 不 知 其 際



要はあんなうんたうんた
清におもたう男士あれは
馬の心算とあづうみな合入
かへ結びまうこの敵は
おぼくつこの推し調
とふやいあやううじあ
くううまわういふ
らまうかゆの
急にあつひあうはま
あうかりうううの
わうううううううう

射手い箇國中に
十人近江信濃若
殿原十人上総下
総持家／奈須金
子秋又殿原十人

うんたうううううう
くままうあはううう
とあがまうううう
ううやまうあはう
まう今日わ場のう
感ずんたあはう
もゆ感再とたう
はく其日の所わ
今日とまうあは
獲あひしう（晩来にう
其ふたあうううう

ま外二浦鎌倉
小山守都文河越
高坂美登屋梶原
横山雪我素野
殿原其年射子地

多岐をゆく世路のつらさの所
 叔父に問ふ事 平時餘秋
 子孫に傳へらるる事 自ら承け
 承けぬに候と云ふの事
 人々もこの候と云ふの事
 わたしのたのしみも亦も
 候と云ふ中 承け承け
 の候と云ふ事 承け承け
 承け承け 承け承け
 承け承け 承け承け

二番一番形波縫
 殿助佐々木隠岐
 判官小田常陸前
 司長井治政太補
 河原田玄内少補



本間弥七海苔遠
 江島松田左近亮人
 奈次自左近門尉河
 村別當芝川弥五
 弥六弥七長田弾

征夷將軍頼朝卿云云
 右殿もいふに所あり内
 仍勝と小條の上をそと入
 ぬくやうに足利上落分
 東にふやうに我討を候
 義龍三浦公義連依ふ十
 左の尉義連北田左衛門
 軍人等者まゝ成依りて
 彦彦富次郎等まゝは
 市市納千重を年流改武
 田彦彦等小を承承

正飯属隼人佐町
 野十郎義人門書
 民部三郎難賀
 大舍人助中澤治
 部大輔和田平三

依ふに其の中へも
 應と射りし時計あり
 合ふの中へも
 とはるゝ射ひて
 ひりまの候や下
 とはるゝ射ひて
 とはるゝ射ひて
 信より振束源を承承
 左の尉義連北田左衛門
 と今日の候の死候

大野修理亮布施
 左殿無衛尉小山
 列當守部三左
 正飯属隼人佐町
 深難重出新

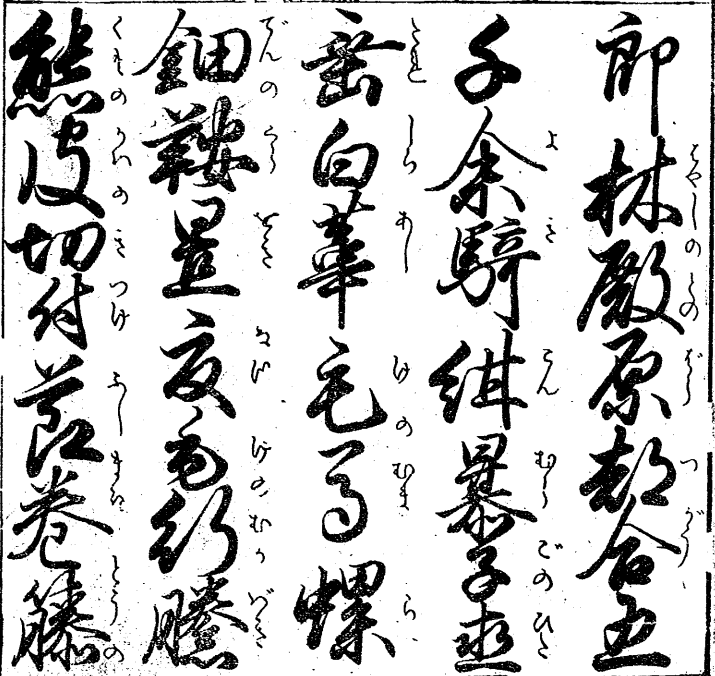
[illegible]

前司 富永 備中
次 市小 蓋原 信濃
三郎 矢野 祐吉
大平 薩摩 守里
見新 檢校 島津

碑にわくく許まじと彦ち
 けり同廿七日將軍の信に
 せと勢とのあひまじと又おひま
 じに信に軍の強さう
 うあふまじと行きて一六國
 八の五五旅程旅鬼のまひ
 かくぢのまじとやとに
 ちばまじとあふまじと富士
 おひまじとまじとまじと
 まじとあふまじと
 ち
 ち
 ち

河内守是五反内
刑入江駿河吉
川左馬元舟誠安
藝者勝田遠江
伎樂雅永助逸

見甲斐守武田馬場次郎長沼周備九郎守佐次武新田三郎小室小太



多分麻とまじがまき
人々がまにまきうん
あれはうぶとまき將軍
あうてあうてあうては
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
麻もまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
將軍の清眼あうまき
あうのまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき

わきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき
まきまきまきまきまき

弓紫皮三星繡襪
小麗草矢原胡
日新慈的扣松炭
三島播磨絵舂
虫密連鎖首毛

る白皮播磨新置
大星の孫月生
白文竹並重藤弓
切符海矢原武統
七巻人々上野八

家黨類古屋土田
寺畧園田界須
美園崎平美一様
大茂金津波為
山横山二宮牧野



児玉本庄岩松村
松野松原楳
登志野吉見小
田村松保雄松山
等為先都合十二

此の事不審なれども
忽我人忙然として平旦の
にあらば推察するに神の
わざなる所なりとあらん
系充運天下今既に編
まり後日たふさひを
得べしといふは誤り
其のゆゑとあるに果
て其の暇より系充大勢
なる神のわざなりと
いふは將軍の言に
あらず

万餘騎並塘打
續十二日厚利大
勢充満千苗土山
水精嶽東三萬夫
多石原望に立馬

系充運天下今既に編
まり後日たふさひを
得べしといふは誤り
其のゆゑとあるに果
て其の暇より系充大勢
なる神のわざなりと
いふは將軍の言に
あらず

是る言を承るに
拍案自覚音全子
也草葉光陰麻
能並進並寸歩
了猪子衆福越弓

物にせしむるは車
 雲もてあふむ日る富
 士の裾野とかがうなみ
 あもはるるにこそは
 公などとのまへに田植
 とおくたの飯をわらう
 大八平のりうるをな
 しく其日のすけのう
 終るにけふあふのす
 富士野のすけ館人
 のまのり富我十年は



苗麿子同廿日
 申國々地海々
 前代末帝
 見物何事増々
 かゝ恒は

五月日 後原
 進上 梶原殿
 今月廿日
 富士野 特陽
 曾我十郎祐成

ありふたふたの尉祐経とて
 多岐に及ぶ又傷にふく其に
 執りてつたふたふたの尉祐
 不修の遺恨あるに及ぶ曾我
 兄弟の父河津と年祐経は
 去安元二年十月伊豆國奥
 郡の村乃如くされ今日未だ
 八幡と年あふた今止て終に
 河津と尉とつたふたふたの
 去安元二年十月伊豆國奥
 郡の村乃如くされ今日未だ

河津と尉とつたふたふたの
 去安元二年十月伊豆國奥
 郡の村乃如くされ今日未だ
 八幡と年あふた今止て終に
 河津と尉とつたふたふたの
 去安元二年十月伊豆國奥
 郡の村乃如くされ今日未だ

五郎尉宗巧謀報
 押宰沙取陣
 伊豆國伯人王友
 なる尉祐経
 國吉浦と文と友

因殺害と甚以
 辛悽沙取陣
 謀賊と文と友
 金見小次郎金
 才将師房同心

乙卯年四月廿三日
 乙卯年四月廿三日
 乙卯年四月廿三日

義とよにたをばひきまなく
 面かかじたりし年時はふ
 まならまれば給の小袖の振舞
 くうたなき唐細布の車蓋
 の煙かこちうちやくは竹なれ
 垣のまのそちやんば
 わが袖と袖と肩のうき
 糸の小具豆の胸のうき
 赤玉の柄の力どしほ
 つまきり膝元とつまきり
 とたきききききききききき

當我大郎后
 玄晦日法書令
 月三日到來禮而
 有見法訖抄小
 次郎福師法師小

張るゝまひらうりや青の
 漆つたうらまゐる色どわ
 の加儀ふりしほひまを夜
 ぬく通うぬけ後さる
 所はぬふすゝまをこれ
 むいふく後ねにまひ
 ねのうらまゐる色どわ
 青の加儀ふりしほひまを
 まを夜ぬく通うぬけ後
 むいふく後ねにまひ
 ねのうらまゐる色どわ

百之事 小治郎左
 京部 居伯 重政
 及 佐 各 別 以 法
 使 者 不 致 君 惟 福
 所 居 志 海 人 之 間



不知 乃 方 惟 間 不
 及 君 進 之 以 自
 能 一 万 法 中 惟
 乃 謹 々

曹我大郎某

もの根の下へ板敷きして
 まゝ斬りたる五年も今
 を恨その方かき置きて
 まゝと胸骨をうけ附き
 を通し板敷きを切ら
 ぬとん源氏重盛の名に
 よくまゝあらも理あり
 を切らうとてまゝに
 まゝのほに斬らるる
 をかづと斬らうとる
 外にもおぼはみこぬ

悔法新番代
 藉一隅時事
 方高曉下者
 之由依作
 作也仍并

けき馬にがごとく
 となにみえな
 うま遠く逃れ
 逃れまゝに
 のおけを
 が人あふ
 お金も
 逃れ
 どの
 の角
 け

平家時

五月廿八日

安達少弼殿

作自畏多
 以款冬開
 玉池

[illegible]

多日花自
 爲與蘭子
 子時春風
 竹禪心春
 前並德康
 京輝



梢下者鷹隼翅
 將亦牧馬頻嘶野
 螢已點觀來一行
 燐 蔓之蔓之蔓
 方風鼓楓挂聲

秋の北風とてくちかへ木も
葉も通さくし判やにに
と耳と一雨にぞ吹かす
時分は秋女いそやまふ
法人にゆくともせんとして
人あやげきんあふ
まけうの女名目いそやま
巨國の位人の海さう
二人のみそ我十弟 秋風は
時分は秋女いそやま
たのけうはあふさう

感味云也 謝庭素
教家以得地素
特逐二日牧特不
堪一夜海村實地
醫保昌丹後之服

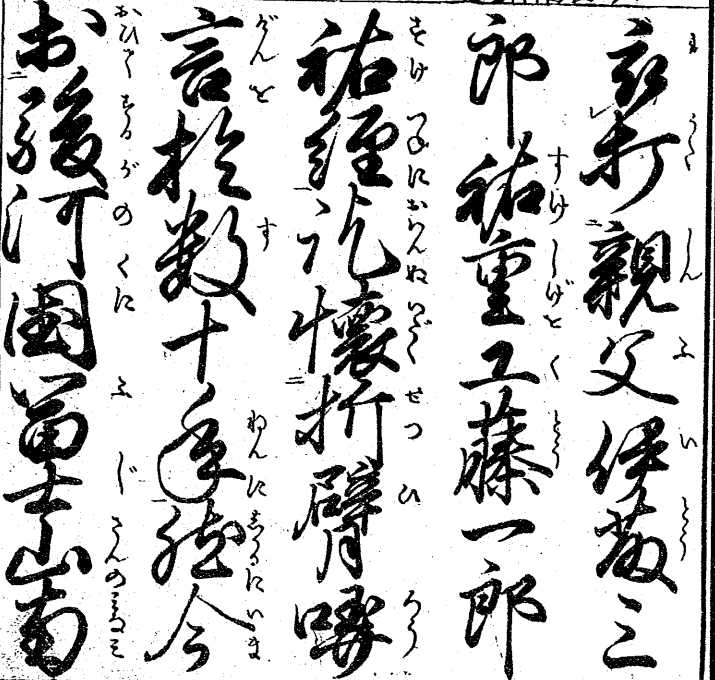
秋の北風とてくちかへ木も
葉も通さくし判やにに
と耳と一雨にぞ吹かす
時分は秋女いそやまふ
法人にゆくともせんとして
人あやげきんあふ
まけうの女名目いそやま
巨國の位人の海さう
二人のみそ我十弟 秋風は
時分は秋女いそやま
たのけうはあふさう

催葉平伊勢岡
然廣漢子一返丑
二姓神步云田反
計女春 破有
とて愛の五哉七

道侍主系繫馬
甲由膝弓一張四
五人太刀一振二
人紅付打着被
敵車矢打致敵

有_レ三隱梁_下康之陸
 者歟_上名業_二考_一
 不_レ遇_一あ_レ河津_上

三郎嫡子曾我十
郎祐成廿二歳同
五郎時宗廿歳於
伊豆國狩野集衆
伴山禁八幡峯坑



東天原蒲手屋
形富香枕恥辱
美合部々々々々
截廻歌呼々々々
涉所々々々々々々

義望各馳集亮圖
小乘殿座於留左
事つ尉座於畠山
次即座形計建
出續松免主外長

一々逃入るに其に保る國
 人地處をたそ名まゝ十
 と戦ひて股へ切付るを
 校に遠く遊んで入る
 八番に信濃國住人海野
 小太郎 幸次 財成と云ふ
 互にさかへ合ふ幸次勝
 幸次を殺すに其に百と
 幸次も命を助すの幸に
 信濃國今田五年信次十
 年信次は其國の下に

沼太郎 結城太郎
 宇都宮氏 孫太郎 小
 山 小太郎 江の遠
 江の遠 平指守
 京義 其蘭科六郎

のりふ信次と云ふ人
 十番に其國に人同持年
 信次五番と戦ひて其
 と切て眼に血を流し入る
 幸次も命を助すの幸に
 信濃國今田五年信次十
 年信次は其國の下に

豊田 又郎 特盛新
 奴畑田 又郎 盛香
 之郎 雲野 小太郎
 荒川 別當 次郎子
 義上 総女 本間八

故とあつて中々其のまゝ
おぼしめしはしめず
人ぞとてふもあつた
秋成にうゝおれまの
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ

冠者原必利根速
似て紋布十二万
解／我
打熱十郎五郎
傳若蜂萬國難

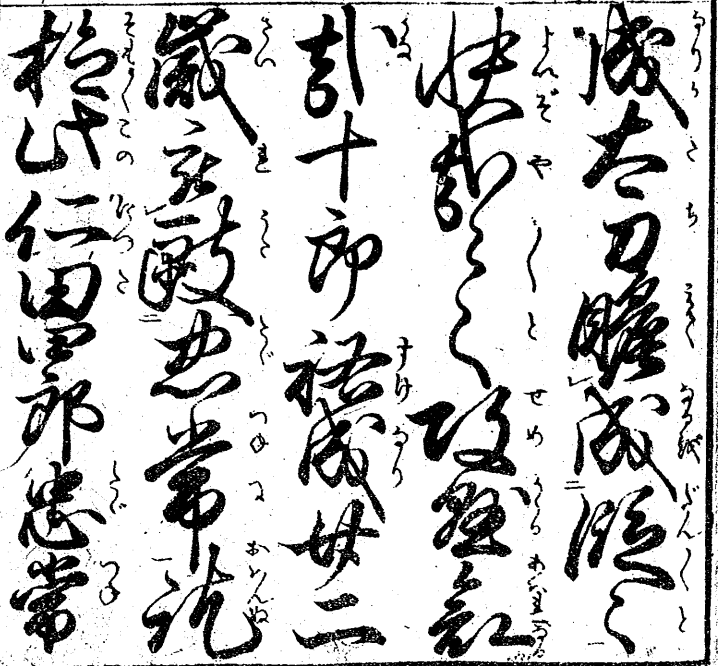
其の市川別あつた
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ
いづれ思ひつゝ

巢似衆議獲者出
安祐成時宗跡危
約受進新種跪
待樹来敵極目
有擲雲細須者

被^レ截落^ニ肱^ひ肘^{ひぢ}人^{ひと}我^{われ}
 有^あ打^{うち}徽^き觸^ふ胛^{うで}胛^{うで}脰^{くち}
 頤^{おほほの}肩^{かた}膈^{はら}輔^{すけ}車^{くるま}之^の
 族^{やうし}新^{しん}追^{おひ}愛^{あい}里^り方^{ほう}八^{はち}
 方^{ほう}鳴^な呼^お也^や乞^ぎ軍^{ぐん}

有十人計時名
世新見見於
區則仁人仁思
忠常与祐成政
寄書附程致名祐

成太刀逆骨乃曉
切嗣之間并延錫
本一寸之高折
除仁田四郎高小
鏡見西極寺左



申すもてて投じしは
 かんくしに田中
 さいもははれしは
 むのぞきしは
 けやましは
 く後しは
 かんくしに田中
 さいもははれしは
 むのぞきしは
 けやましは
 く後しは

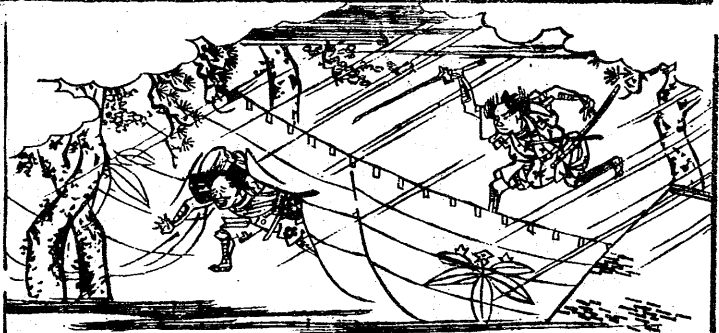
書者藤麻鹿
 歌中藤麻鹿
 龍田猪十寸丸
 担奉魚新
 中教馬捨流送

申すもてて投じしは
 かんくしに田中
 さいもははれしは
 むのぞきしは
 けやましは
 く後しは
 かんくしに田中
 さいもははれしは
 むのぞきしは
 けやましは
 く後しは

手系尾骨痛平
 継系花曲進退
 校刀打立流絶
 漁才中餘川風
 鹿和山首我十郎

三十八人
 仁田の運のちのちや中
 人ぐまをく仁田の運
 追ひ西へは金平と平太
 情に思ひあふく討た
 室の立希時紋之祐成
 後、國へも三時
 切替ふと旧丹格一事五

波瀾生男子
 偶見忠孝持女
 子者言取舞仁
 田今般面目偏相
 苗仁田軍部忠孝



一人也五郎時
 宗立千裏在于
 表裏截廻程
 法人失治時
 叛我金紛紛截

舟に乗りて見れば
 船中人捨てておちて
 一舟に乗りて見れば
 船中人捨てておちて
 舟に乗りて見れば
 船中人捨てておちて
 舟に乗りて見れば
 船中人捨てておちて

入閤制陣頭殿
 中嬪向並居下
 よう下膳動
 奥の廊下と時
 宗子組より上

面をうつて見れば
 舟に乗りて見れば
 舟に乗りて見れば
 舟に乗りて見れば
 舟に乗りて見れば
 舟に乗りて見れば
 舟に乗りて見れば
 舟に乗りて見れば

在下下時宗不属
 必魁少校似高遠
 費入法中中
 丸如葉如金国庵
 鳩結やれり

あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ

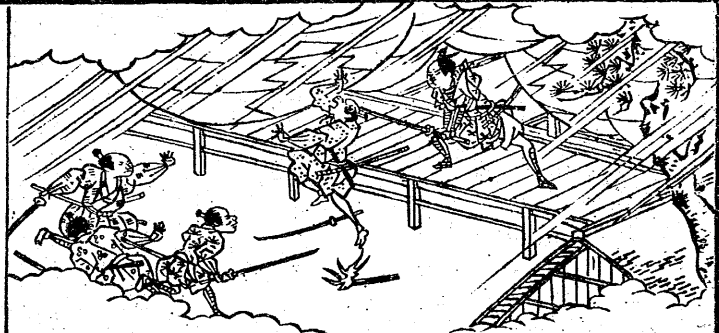
拾身命落重
銀鐙惣時家紋
唐面付間正存
申技託皆言中
丸道新は難兄吉

あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ
あつてふゝあつてふゝあつてふゝ

云く抑け親討
来委細弱く表
伊豆奥野特祐
成時家親父河津
三郎祐重中

ちやあてふふかん
 是ういふやうに
 開くは言ふやうに
 此の世に於ては
 とお具へては
 其後留る盛況未だ
 と云くは
 死骸と其の
 多う
 時政と

二歳中餘箇國約
 其中有大カ男
 之勢
 束秋野
 挽持



藤常下豊
 白落矢
 檀弓
 節大
 奥野

とれううぐ有任ゆうとそ
 けのく入尔平決た其の殿
 の別時たと具々思ふやま
 中々固くわき通くもあま
 五年さうあひたうたは後を
 一族とあひたうたは後を
 由人又す幼推の時うも脱に
 今世の念念とうもあひた
 時うもあひたうたは後を
 うもあひたの念念とうもあひた
 うもあひたの念念とうもあひた

今あうせのうもあひた
 下の武將の位もあひた
 うもあひたの念念とうもあひた
 うもあひたの念念とうもあひた
 うもあひたの念念とうもあひた
 うもあひたの念念とうもあひた
 うもあひたの念念とうもあひた
 うもあひたの念念とうもあひた

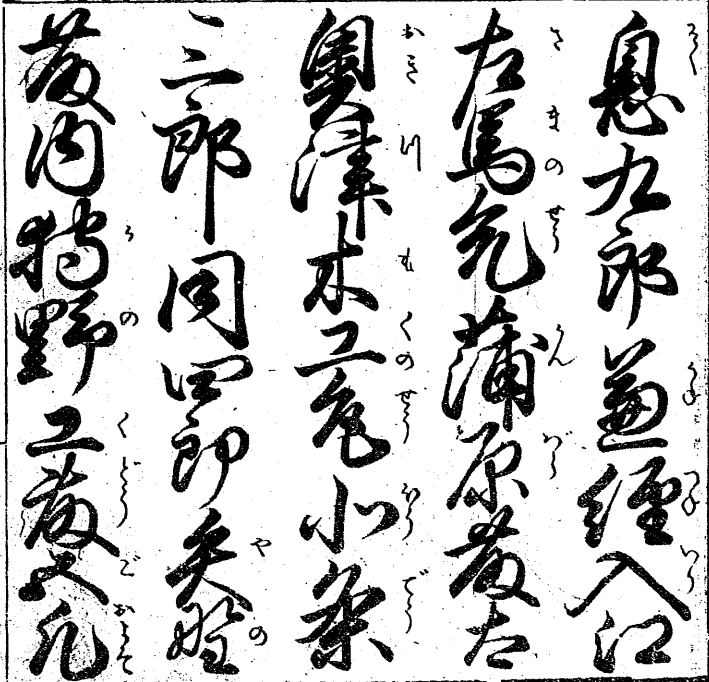
毛馬五腕太尾
 雙胞弱老梨地
 前屬白度痛鞍
 連臺新新天色
 結紗緋手結竹

根鞭く締赤草
 堤赤沢山巖木間
 無嫌部木杉木盤
 石雞取く取
 降く取く取

業大見小者大い
 情二郎定一二
 驛村客便者祐重
 是心久次美庄相
 福也亦时有舍人

誰く大庭平冬同
三郎侯野五郎山
内龍口大郎海老
名源八萩野又市
去肥次郎吉平子

息弥太郎遠平
書我太郎竹下松
八藍澤弥太郎子
息弥六生經吉香
次郎經武茂八子



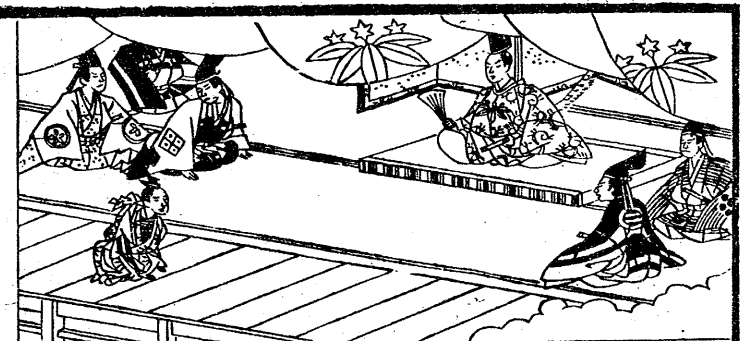
大名五百人部合
三子余人其尉鎌
倉及中満人合
満佐殿其打親父
十郎号一万成

五歲五郎名譽王
成之方今護衛殿
号征夷將軍家
大將軍法陣隆
有十二萬餘人

就中、者、事、所、
法、中、以、宿、造、相、
今、致、用、心、作、是、事、
只、二、人、公、武、打、振、
續、相、見、去、祐、經、懷、

手越が如王菰園
懷黃漱川龜鶴
祐成時宗裏傾城
お袍衣推隔合那
平祐經と押勢

封死せむとくはあら
 ねと様せむとくはあら
 べーとつひひつとまの
 ものうとんたひとのまを
 とひひつひひつとまの
 いひひひひひひひひひひ
 あれれり事うううううう
 願ひうううううううう
 其法所とてめめめめめめ
 今ふふふふふふふふふふ
 今ふふふふふふふふふふ



俄に起るゝとたふ
 究切整田施施を於
 戦場揚名を於漢代
 今度出関玉極を
 海東國古徳津を

王友内北威怒臨
 時無益死事事其
 淹お中国の思現
 河立打首我敵原
 啼泣眼涙致悲

人の思ふは思ふにや
やとれ一時にや
勇士の才は思ふにや
所詮は思ふにや
人の思ふは思ふにや
勇士の才は思ふにや
所詮は思ふにや
人の思ふは思ふにや
勇士の才は思ふにや
所詮は思ふにや

人の思ふは思ふにや
やとれ一時にや
勇士の才は思ふにや
所詮は思ふにや
人の思ふは思ふにや
勇士の才は思ふにや
所詮は思ふにや
人の思ふは思ふにや
勇士の才は思ふにや
所詮は思ふにや

像無光也
大房殿
十郎
仁田物語
見今

吾も
不能記
漢家
黨者
改於保

今も松崎のりきよはかた
足青が糸の如く所へんく
人の海もさうじき其後
ふゆもぬれ糸が流るる
因のてく流るるにふく
其家へ深全殿へ恨もうわ
軍に敵對のたてあふ
糸小松平ひんあのはか
ら楠は流料のふきく
に首を切らふて
かくれまふ身の別流の才

成時宗の三後乃
害武老羅武徳
常介大も腰痛
見同作是則
隨爲大も美多

に一時く討たむと
後世はたどられは
の不商人あまのそ
まゝとて商人へ流
矢ひたるは八平の軍の
下知くく曾我と
古今もあまの勇士に
あまたひんあまの
ふくたのそは
は武士に社と造る
と神ふあまの曾我と

持國之戦無後羅
と四盤とけ徳作
秋里以世有可
法被露作悲恨
漢

富士北繪抄終

少弼盛長

五月廿日

進上
梶原殿

富士野々素戔

插花初心傳

全部
四冊

此書を渚先生の秘蔵と云ふ
初ん生元をまゐるゝ人合際
なうゝゝゝゝ道ふのゝ名を
うゝゝゝゝふけふゝかざる

東都醉花齋宗匠
初學方

生花千筋麓

全部三冊

太阪書肆

秋田^{陸奥}太右衛門藏板

此書ハ東都醉花齋宗匠一家の伝乃がわく
生花の道をも属さず、筆・生才・扱あひたの乳茶葉
数条を半一門人へ切紙として授けり。其
秘を秘決を殊に伝ふて切はするの大全之